

第十八回「公德文芸賞」入賞作品

【俳句部門】

最優秀賞

志望校判定死んだせみと私

信愛女学院3年 矢野 実莉

【評】「志望校判定」は受験生の最大関心事。「死んだせみ」でそのショックがみごとに象徴されていますが、この句には「嘘」がありませんので、感動が十分に伝わります。一句の破調にも、物語性（ドラマ性）があります。（岩岡）

優秀賞

満月が照らした君の片えくぼ

第二一年 安部 真菜美

【評】片えくぼの君の顔を満月の光が照らしています。片えくぼは、常々この人を好きと思う象徴的な身体の一部。幸せな時間を切り取りました。「満」と「片」が一句の中で響き合って面白い一句となりました。（西口）

かき氷とける間の会話かな

信愛女学院3年 牧野 美咲

【評】言いたいことを言い出せない、そんな夏の切ないひと時。溶けていくかき氷がその時間を表しています。等身大の高校生的一句。泣きたいような作者の心が冷たい氷の透明感を際立たせます。（西口）

浴衣着て君と行きたかったなあ今年

熊本商1年 小崎 葉

【評】一句の意味はシンプルですが、このつぶやきのように率直なことばに、真実味があり共感もてます。これまた五・七・五におさまらない破調や口語が、いかにも自由で若々しく高校生らしい一句です（岩岡）

校門に立つ先生のシャツ白し

第二一年 山口 さくら

【評】「白シャツ」は夏の季語。いかにも涼やかできりりと校門に立つ先生。「シャツ白し」と、それだけで先生のたたずまいを写生した力に注目しました。これから学校の夏の一日が始まる元気と緊張が伝わってくる句です。（岩岡）

毬つく子飛ばし飛ばしの手毬唄

信愛女学院3年 矢野 寧々

【評】「意味」よりもその「心」が、子ども達に代々受け継がれてきた手毬唄。覚えている部分だけを口ずさむ子どもに、かつての自分を重ねる作者の優しい視線。手毬唄の美しさと哀しみが句の底流に響いています。（西口）

入選

夏の陽をはね返しました漕ぐペダル

玉名工2年 竹内 雄大

鳴り響く風鈴の音祖母の家
妹とだらりとすこす夏休み
ぐずる子を嗤うらんちゅうポイの穴
実家帰省モーター音と蟬時雨

球磨中央2年 北川 琉汰
芦北1年 中野 楓香
第二1年 丁田 帆和
文徳2年 山下 貴弘

努力賞

満月や君には隠しごとばかり
後悔を心の中に睡蓮に
なにをまつ無人の駅の蛍草

愛知・旭丘2年 渡邊 美愛
水前寺高等学園1年 山田 光希
玉名工2年 松本 愛華

夕チアオイ空みて咲う雨上がり

九州学院2年 植前 葵

夏の夜葉擦れの音は子守唄

御船2年 大窪 千寛

青春を駆け出してる桜道

北稜1年 牛島 愛香

伝えたい線香花火消えるまで

球磨工2年 松本 栞

弟に身長越された八月

第二1年 村久保 朱里

恍惚の角氷溶けるレモン水

文徳2年 岡田 陽豊

【総評】今年はい県内外から3千点を超える応募で、いよいよ認知度が高まった感があり、選者の責任の重さを感じます。ただ量も質も大事で、平凡で月並（つきなみ）な発想の句が多かったことも例年通りでした。高校生の生活の範囲がどうしても限定され感動も限られていることは事実です。とはいえその中でも、自分をしっかりと持ち、自分の喜怒哀楽を飾らない率直なことをばを探し出して表現することが大事です。率直な思いと表現こそ、若い人たちに与えられた特権なのですから。

今回もまた右の視点で選句させていただきました。とりわけ今年は、個性ある表現に出会えて幸いでした。誰か他人のことばではない自分のことばにこそ、いのちがあります。聖書にいう、「始めにことばありき」で、ことばから世界がはじまります。このコロナ禍の中で、勉強もスポーツも大変ですが、日々季節をを大事にしつつ、自分だけの感動を自分のことばで表現してください。（岩岡中正）

応募された3026句からは、キラキラと輝く高校生の「今」が溢れていました。中でも、ここで自分が生きているのだと（実感）している世界を詠んだ句や、自分の心の中の深いところにある（思い）を自ら紡ごうという姿勢が強く感じられた句を選びました。

高校生って厄介な時期です。子どもと大人のどちらにも属せない。中途半端で、足元が頼りなくて。何をしたいのか考えて選択しなさい、と周囲から言われ続け、選べない自分の無力さに辟易。時々開き直ってみるけれどそんな態度しか取れない自分が情けなくなつて、「嗚呼もう！」と叫んでしまう。その叫びこそが心

の声です。最優秀賞の作品から、嗚呼もう！という思いが溢れ出しています。しかし、絶望的なことを一句にした途端、作者はもはや絶望の次の次元に足を踏み込んで、新しい世界を見ているはずです。

詩にはそんな力があります。もちろん十七音の小さな俳句にも。(西口裕美子)

【短歌部門】

最優秀賞

心込め摘芯摘果わき芽とりルビーに負けぬトマトの輝き

芦北3年 濱田 智恵

【評】芦北高校は以前は芦北農林高校だった。今も農業の実習が行われているのだろう。作品はトマト作りの作業の苦労とその成果を丁寧に短歌作品に仕上げた秀作。ルビー色に輝くトマトが見えるようだ。(橋元)

優秀賞

向日葵が太陽を追う健気さに愛しく思う十六の夏

菊池女子2年 安倍 瑞季

【評】十六歳の自意識のきらめきの思いが込められています。「健気さに」としたところにそのことがよく表れています。青春性が感じられる歌です。(塚本)

「あ あれだ」夏の夜空にアンタレスきらめくのを見て浮かぶあの人

玉名工1年 平田 莉織

【評】天の川を見上げたときの、初句の「あ あれだ」に自己の心理の合点を見出した納得感がよく出ています。明るくて元気を与えてくれる「あの人」への思いがさわやかに伝わってきます。(塚本)

おはようの君の一声で一日中いや一週間全部幸せ

専大玉名1年 古閑 花音

【評】そういうことあるある、と気付かせてくれる歌です。「一日中いや一週間」という心理的時間が共感をもって迫ってきます。健全な気分の高揚感は若者のみならず、全ての人に共通するものです。(塚本)

オンライン上は制服下部屋着こんな生活いつ終わるのか

第二1年 永井 響子

【評】コロナ禍でオンライン授業に切り替えた学校も多かった。画面に写る上だけ制服で、下は部屋着という格好で受けた授業。友人にも会えない現状もあり、正直に嘆いている。上下で服が違う所に焦点を当てたのが具体的に面白い

歌になった。(橋元)

仰ぎみるコバルトブルー湧き上がるホワイト足して夏のキャンパス

マリスト学園1年 矢内 あかり

【評】夏空のコバルトブルーとホワイトの積乱雲。キャンパスとあるので一見絵を描いている歌のようだが、夏空をキャンパスに見立てて表現した歌と解釈した方が作品がおしゃれになる。(橋元)

入選

押し寄せてくる夕焼けを背中にし母と未来のことなど話す

愛知・旭丘2年 渡邊 美愛

高校で勢いで入った合唱部小中高で一番楽しい

学園大付1年 平金 音和

「みーちゃん」と飛びついていた妹が最近なんだか大人になった

熊本商1年 原田 美月

夏風に吹き飛ばされた麦わら帽川面に浮かんで流れて行った日

熊本商2年 坂田 勇士郎

愛猫の寝顔にいつもいやされるいやしの力どこから来るの

球磨中央2年 赤池 星奈

努力賞

道端に咲きはじめにし菊の花気付けばほほに秋の風ふく

文徳2年 山崎 慈英結

玉子やき自分で作るお弁当大人のかいだんのぼっています

荒尾支援3年 前野 友希

幸せは一人ではない周りには家族がいる友達がいる

ひのくに高等支援3年 上土井 瑛仁

羅生門読んで浮かぶイメージはただひたすらに髪抜く姫

学園大付1年 龍官 希明

また今日も早朝からの走り込み合宿の朝は明日も続く

熊本商2年 吉田 百合

弓をひくセミの声だけが響くなかの射る音「よし!」の声

熊本商2年 宮崎 朱璃

友人と食べたスイカの種飛ばし庭に残った夏の思い出

専大玉名1年 柳原 拓巳

雨がふり雲がなくなり虹がでる生きることとはそんなかんじだ

熊本商1年 青木 詩音

【総評】作品のレベルが上がり、学校生活だけでない多様な場面を題材にする傾

向が昨年よりさらに増え、作品に多様性が出て来た。

コロナ禍の作品は思ったよりすくなかったが、自らの生活に引きつけた具体的な作品があったのに感心した。今年は県外の高校からの応募もかなりあり、超高校生的な作品もいくつも見られたが、敢えて高校生らしい作品の中から入選作を選んだ。また、自然詠が増え、短歌を楽しんで作る姿が見えてきたのが嬉しかった。

このコンクールも二十年近くになる。当初は先生から言われて仕方なく作ったという作品が大半を占めていたが、今では少数派である。今回、大量応募の学校があったが、いずれの作品もある程度のレベルを持っていて、事前に短歌の指導が行われていたことを感じた。(橋元俊樹)

今回は、応募の高校数も作品数も最高でしたが、内容の面で大きく今までと異なっていると感じたのは、作品の素材です。夢に輝き希望に満ちている時期の高校生活ですが、前回まで多かった部活動、課外授業、花火大会見物などをうたった作品が減ったところです。これはまさにコロナ禍の影響です。

今までとは違う日常の高校生活ですが、自由なイメージの飛躍と、日本古来の短詩型がもつ包容力を信頼して伸びやかな精神活動の一環として、更なる応募を期待したいと思います。(塚本諄)

【自由詩部門】

最優秀賞

「目隠し」

窓の外の木の葉っぱが

凜と立っているところを見ると……どうも

わたしはこの首を絞めたくなるのです

こう……きゅつと

さんさんと照る陽をあびながら

めきめりと育つ青々しい一枚一枚

ひとえだ、太い幹

ああ、ああ、

なんてまぶしい

とても、とても

うらやましい

知らず知らずのうちに付いていた
左手首のつめのあと

わたしは再びノートの手端っこ
赤で書かれた百分の二十七に
ぐり、ぐり。ぐる、ぐる。

同じ赤色で目隠しをする

濟々鬢3年 水野 伶香

【評】これは意外性と不意打ちの1行に満ちたユニークな作品である。それは単なる意外性ではなくある普遍性を有している。青々とした葉っぱを前にして、うらやましくて、首を絞めたくなくなるというのは青春のエピソードを超えて、言葉によって生きる人間の宿命を表している。「左手首のつめのあと」もいい。終連も優れた詩に相応しく謎めいている。

優秀賞

「化学変化の観察」

窓をぼーっと眺めていると

次から次に

駅も、緑も、人々も流れていって

さらさら、さらさら、

すると今度は時間が流れ込んできて

さらさら、さらさら、

こうしている間にも

自分の人生の砂時計の砂は流れ落ちていって

儂く、しかし力強く

今って言っている間に、考えている間に

今は過去になって

未来は今になる

その化学変化をただただ見つめていると

数年前の私が蘇ってきて

その時の科学実験を

たくさん考察しながら

たくさん観察しながら

楽しそうに見つめるのだ

そうするとふいにがたと音がした

実験失敗、かと思いきや

ドアの向こうで私を呼んでいる声が聞こえた
私は慌てて荷物をまとめ
まるで白衣をたなびかせるように
私を呼ぶ時の中へ進んでいった

福岡・八幡1年 川本 濤

【評】「今は過去になって／未来は今になる」。私たちが生きている時間の流れの奥に潜む不思議さを化学変化という言葉で表したところが、この詩の新しさである。私たちはふとしたことから時間の深淵をかいま見る。この詩の最後の2行で、作者は現実の時間に戻っていくのだが、それは今までの日常とどこか違っているのだ。

「思春期の僕ら」

何もなければよかった
日常のど真ん中で
涙が止まらないんだ
別に悲しいわけじゃない
別に苦しいわけじゃない
晴れている空に苛立ちを覚え
笑ってるあの子が眩しくて
ただそれだけ
ただ、それだけなんだよ

何もなければよかった
日常のど真ん中で
今日も僕たちは探してる
この涙の止め方を
この心の満たし方を
まだ未完成な僕たちは
探し続けているんだ
自分が輝ける色を
自分だけの春を
ただ、それだけ
ただ、それだけなんだよ

人吉2年 下林 璃音

【評】この作品は平易な表現で誰もが抱いている思春期の感情を自然に表現している。悲しくなくとも、苦しくなくとも、止まらない涙。その涙の止め方を探すという詩句は秀逸である。三連の「自分が輝ける色を／自分だけの春を」が今一つ工夫がほしい。とても素直ないい作品である。

「コーヒー」

あたしはコーヒー嫌い
だって苦い

コーヒーの苦さは
舌に絡みついて離れない
細胞が壊れてしまいそう

あたしはコーヒーが嫌い
だってコーヒーを飲むママは

四角い画面に夢中

あたしのことをちっとも見えてくれない

大人になりたくて

あたしはコーヒーに手を伸ばす
でもやっぱり苦くて

コーヒーの茶色が消えるくらいのミルクと

山盛りの砂糖を入れる

それなのに

どうして苦いの？

あたしはコーヒーが嫌い

あたしはまだこどもだ

物わがりのいい大人になんて

きつとあたしはなれやしない

いや 本当は

あたしはコーヒーが嫌い

あの時のことを

今でも思い出すから

だからあたしはコーヒーを飲まない

濟々巒3年 三輪 ことね

【評】詩はこんなことも表現できるのだと感心させられた。コーヒーが嫌いな理由がママと関係があることが次第にわかっていく。大人になろうとして砂糖とミルクを入れて飲もうとしても飲めない。物わがりのいい大人への拒否が痛々しいほどきっぱりとしている。

「美しいもの」

美しいものを言葉で区切ることができない
美しいものに出会ったら 口を閉じる
そして じっと見つめ
それから 耳をすますのだ

起き抜けに小鳥のさえずりを聞く朝は美しい
きらめく星々に祈りながら眠りにつく夜は美しい

果てしない可能性を秘めた心は美しい
限りなく広がる宇宙は美しい

この世界は美しいもので溢れている
美しいものを言葉によって空虚なものにしてはいけない
世界を言葉で区切ることができないように
私たちはただ沈黙によってのみ美しい世界に浸るのである

人吉2年 杉本 怜

【評】この書き手には、世界にあふれている美しいものを感じる心が備わっている。そのうえで、より高いものを望みたい。例えば「美しい」という言葉を使わずに、この詩が書けないだろうか。また「沈黙によってのみ」はその通りなのだが、その沈黙さえも言葉なしにはあり得ない。これはとても深いテーマである。

「名も知らぬ 誰か」

私は 立っていた
九階建ての屋上の塀の上に
星空に背を向けて
全てに背を向けて

黒い風が ないている
誰かが私に 声をかける
名も知らぬ誰かが
世には貴方より苦労している人はいる
そんなことを 言っていた
私はこの人が嫌いになった
ありきたりな言葉を並べる この人が

生きていくくせに知ったような口をきく この人が

あなたは死を恐れているのか

彼は表情を変え、こんなことを訊いてきた

彼の言葉には耳を傾けたくない

でも 考えたことはなかった

死という行為が 怖いのか

死んだ後が 怖いのか

生き恥を晒すことと どちらが怖いのか

気づけば私は飛んでいた

塀の内側に

この選択を後悔するその時まで――

名も知らぬ彼は 微笑んだ

幾つもの 感情が 交錯し

佇む彼の腕をぐいと掴もうと手を伸ばす

掴んだのは 虚空だった

第二1年 仲村 終人

【評】この詩は事実なのだろうか。それとも想像上の表現の世界なのだろうか。いずれにしてもこの作品は作者にとつての「内的な真実」であることは間違いない。こういう詩は論評すべきものではない。このように自分に向き合い、正直であり続けられ、辛くとも自らの真実に至るだろうから。

入選

「若き友へ」

あの日はいつもと同じ放課後でした。

あなたが亡くなったと先生が泣きながら言いました。

あなたが十四才を迎えた次の日でした。

あなたは自ら命を絶ちました。

あの頃は何気ない毎日でした。

あなたはみんなの人気者でした。

あなたといると毎日楽しい日々でした。

あなたとくだらない話で盛り上がっていました。

あの時棺の中のあなたの顔を見ました。

あなたは眠っているようにしか見えませんでした。
あなたは今にも起きて話しかけてくれそうな表情でした。
あなたは首元を隠してただただ眠るのでした。

あの日はいつもと同じ放課後でした。
私は受け入れられませんでした。
私はひたすら泣きました。
私はどうすることも出来ませんでした。

あの頃は何気ない毎日でした。
私は何も気付けませんでした。
私はあなたに冷たく接することもありませんでした。
私はもつとあなたとたくさん話をしたかった。

あの時棺の中のあなたの顔を見ました。
私がいくら呼んでも返事をしてくれませんでした。
私はあなたに別れを告げたくありませんでした。
私はあなたと共に生きると心に決めました。

熊本商1年 水田 羽南

「タカラモノ」

嬉しくて流す涙も
悲しくて流す涙も
楽しくて笑い合う日々も
苦しくて泣き叫ぶ日々も
一つ一つがかけがえのないもの
全部、私のタカラモノ
好きな人にドキドキする日々も
嫌いな人にイライラする日々も
好きな服を着てワクワクする日々も
友達同士のケンカを見てハラハラする日々も
一つ一つがかけがえのないもの
みんな、私のタカラモノ
美しい世界も
汚れた世界も
人を愛しく思う気持ちも
人を憎む気持ちを

みんな”私“の一部分で
何一つ欠けてはいけない存在
嬉しいことも
嫌なことも
楽しいことも
苦しいことも
みんな、みんな、私の大切なタカラモノ

第二一年 玉井 種璃

「無題」

一人の赤んぼうの鼓動が聞こえる
どくんどくと脈うち生きていることを
感じさせられる

一頭のクジラの鼓動が聞こえる
ばちゃんばちゃんと打ちつけ生きていることを
感じさせられる

一羽の鳥の鼓動が聞こえる
ばさばさと羽をはためかせ
生きていることを感じさせられる

一匹の猫、一匹の魚、一匹の蝶、
幾重にも重なる鼓動が聞こえる

地球の裏側で鼓動が聞こえる
一人の少女の叫び声
一人の人間が銃を撃ち
ばんばんと響かせ
生きるとは何だったのかを
感じさせる

人吉2年 上原 千穂

「誰か」

私を産み育ててくれた、両親

私の隣にいてくれた、友人
私に勉強を教えてくれた、先生
私に笑顔で挨拶してくれた、近所の人
私に英会話のレッスンをしてくれた、留学生
私が食べている野菜を作ってくれた、誰か
私の使っている茶碗を作ってくれた、誰か
私が着ている服を繕ってくれた、誰か
私が住んでいる家を建ててくれた、誰か
私が歩いている道の舗装をしてくれた、誰か

誰かに生かされてきた。
誰かのおかげで生きてきた
会ったことはない。
誰なのかも分からない。
でも、私はたしかに今を、生きてる。

ありがとう
私も、あなたにとつての誰かになりたい。
あなたをかたちづくる誰かでありたい。
私を生かしてくれる、あなたへ。

人吉2年 吉川 涼々

「終焉」

懐かしき道に歩を進め
夏告げる蝉の音、遠くなり
生ぬるい風が頬を撫で
眩しい太陽に背を焼かれ
「ジトっ」と汗がにじんだら
上見れば、朱
下見れば、緋
あたり一面、焼け野原
地獄にいるかのようにだった
暑さと熱さの狭間に置かれ
重い右足、前出すと

「サクツ」という音がして
引かれた右足、つたう汗
「ジジツ」と震えた左の羽
テカテカ、バラバラ、右の羽
夏告げた蝉 17の私
時が止まった 目があった
地獄にいるかのようにだった

鎮西2年 櫻木 寧々

努力賞

「ピアノ」

受け止めてくれる
大きな海のように
包み込んでくれる
温かくやわらかな日の光のように
よろこび かなしみ
はかなく 尊く

繊細な旋律を織りなす
軽快なメロディーを奏でる

勇気づけてくれる
くもりがかった空を
私を希望へと導くクレッシエンド
ここは 私だけが知っている
美しい世界

人吉2年 岡村 和桜

「生きるとは」

私たちは毎日を生きています
体を起こして起き上がり
ご飯をかむためにあごを使い手を使い
良く噛んで食べています
私たちは毎日無意識に行動をして生きているということですよ
生きることは一番偉いんです

凄いことなんです
学校に行くのもそう
風呂に入ることも寝ることも
何気なくやっていること一つ一つが
凄くて偉いことなんです
毎日私がしていることは
自分を毎日褒めることです
自己肯定感を高めることは大切なんです
私はこれからも自分を褒めていきたいと思えます

ひのくに高等支援3年

鶴田 昂

「ただ一雫だけ」

雨、池のいろんなところで波紋が広がる
広く流れのない池の端から端まで
複雑にからまりあつて波紋が広がる
一雫、池のどこかで波紋が広がる
広く流れのない池の端から端まで
たった一つの輪郭を乱すことなく波紋が広がる
むやみな主張を繰り返しても
多量の情報と複雑にからまりあつてしまう
ただ一雫だけ
万人が納得し一丸となれる主張を

人吉2年

和田 幸晟

「生に寄せて」

こんな青臭い話
数年経ったら忘れるような「嫌い」でも
目下最重要課題なわけで
生きづらい 生きづらいねえ
やらなきゃいけないことたくさんあるけど
あればあるほどやりたくなくなるし
きつとこんな言葉の綴り方
若いねって言葉で片付けてしまえる大人には嫌われるから
好きなものより嫌いなもののほうが多いし
対等に扱われないけど大事にされたい人ばかり

結局妥協でどうにかなるけど
下らないプライドで邪魔しちゃうから
一億総詩人時代
相思相愛なんかじゃなくても
君の未練になればいいな

濟々巒3年 吉野 美羽

「無題」

私は詩をかいている
時間をかけて黙々と
語彙の引き出しの中から
言葉をひとつずつ引っ張り出していく

私はふと考える
まだ幼かったあの日
私はどんな気持ちで
詩をかいていたのだろう

わたしはしをかいている
きょうかしよのおてほんをみて
じぶんのすきなものを
たくさんのつけてかいている

わたしはふとかんがえる
おおきくなったら
わたしはどんなきもちで
どんなしをかいているんだろう

今も変わらないことがひとつ
私は詩に自分を表現していた
幼い日を振り返ってはじめて気づいたことだ
あの日 私にとって詩は
タイムマシンになった

人吉2年 原 純夏

「私とあなたの違い」

私とあなたは生きている世界が違う
一緒にいる時間はあっても一緒にいない時間の方が長い

私とあなたは見えている景色が違う
向いている方向は同じでも私の瞳には私は写らないしあなたの瞳には
あなたは写らない

私とあなたは生きていられる時間が違う
生まれた時間も死んでしまう時間も多分違う
片方が置いていき、片方が置いていかれてしまう

私とあなたは信頼している人が違う
お互いが知っている人がいないような気がする

私とあなたは感情が違う
私とあなたは考え方が違う
私とあなたは
考えれば考えるほど違いを見つけてしまう

こんなに違いを見つけてしまうと
あなたを遠くに感じてしまう

熊本商1年 平岡 謙

「殺した罪 一番重いのはどれ」

私は人を殺めた

私は私を殺した

他の誰かの所為ではない

私は私に光を見付けられなかった

罪になるのだろう

生きていたら自殺未遂に。

僕は人を殺した

僕は僕ではない誰かを殺した

他の誰かは見ている

僕はその誰かに殺されそうになった

罪にならないだろう

生きていたら正当防衛に。

君は人を殺害した
君はおなかの中の子を殺した
他の誰かは助けてくれない
君は子を育てられる意志が足りなかった
罪になるのだろうか
生きていたら育児放棄として。
全て尊いはずなのに
全て等しく命なのに
罪の重さは変化する
命の重さはどうなのか。

球磨工2年 十時 慧

「後ろめたい幸せ」

「平和は大切です。」とはいうけれど
スマホの中で人を撃つ
いいんです。現実じゃないから。
掲示板にありつただけの暴言を吐く。
いいんです。ばれないから。

「平和は大切です」とは言うけれど
僕らは戦争まがいのことをしている
隠れながら、ばれないように。

「平和も大切だけれども」

人吉1年 島本 恵佑

「幸者」

生まれて間もなく私は、見知らぬ家族に引き取られた。
その家族は皆、キラキラとした目で私を見てくる。
幼稚園生ぐらいのガキがしつこく触ってくるのがとても嫌だった。
私はすすく成長し、家の物を壊したり、このガキと一緒に
に走り回ったりした。あの頃は私よりも足の遅いガキ
を蹴り倒すのが一番楽しかったな。
そんな日々を私は当たり前前に過ごしていた。
年月が過ぎ、あのガキは高校生になっていた。

大人びた声で私の事を呼んでくる。
珍しくこいつと2人での散歩だ。

あの頃みたいに走り回ることはしなかった。
何処か悔しい気持ち湧いてくる。

年月が過ぎ私は思うように体が動かしにくく体力
も落ちてきているのを感じてきた。

そんな私を元気づけようと、この人は遊びに誘って
くれたり、たくさん撫でてくれた。

その時は君に素直に「ありがとう」が言えなかったんだ。
私はついに病にかかってしまう。

最後の夜、ただただ苦しかった。
もうすぐこの家族とお別れなのも分かっていた。

君は私の意識が薄れていくのに背中を何度もさすって
名前を呼んでくれた。

私は初めて心の底から「ありがとう」が伝えられた。
ああ幸せ過ぎたんだ。

人吉2年 津崎 一航

【総評】詩を書くということが、いつも満ち足りて幸せであるとは限らない。それは深い悲しみや、解決できない苦悩の表出であったり、かなわぬ夢や、永遠なものへの憧れであったりする。特に多感な高校生の詩であれば一際そういう様相を濃くする。技量としては未熟でも、心打たれる1行や、未知の洞察を予感するフレーズに出会えた喜びを今年も感じさせていただいた。今年はコロナや災害により、夢みていた日常が壊れたことへの、戸惑いや怒り、そしてそこから懸命に価値を紡ごうとする作品が目をつけた。死をテーマにした複数の作品も印象的だった。友達の死を歌った詩で「私はあなたと共に生きる」とのフレーズは生きた言葉として胸に迫った。また、ぎりぎりの瀬戸際で、この世界に戻れたという作品もあり、それこそが詩の力なのかもしれないと感じた。思春期の死は再生と紙一重であることを考えれば、詩は生き直すための武器でもあるのだ。(内田良介)

【肥後狂句部門】

最優秀賞

今是我慢 白靴はまだ白いまま

信愛女学院3年 加藤 万葉

【評】長引くコロナの影響で今年も夏は自粛のまま。お出かけ用の新しい白い靴は履くこともままならない。コロナに対する心の焦りを白いままの靴と表現し、詩的で美しい狂句として仕上げたところが秀逸である。(鳴神)

優秀賞

光る汗 静けさの中弓の音

熊本商1年生 結羽

【評】額に汗しながら袴に襷掛けでキリリと弓を引く作者の姿。静寂の中で放たれた矢のスピードまで見えるような清涼感漂う句である。(下田)

今是我慢 母の手料理帰省まで

城北1年 熊川 景太

【評】寮か、下宿生なんだろう。学年を見たら1年生。実家を離れてまだ半年余り、母の手料理が恋しい頃であろう。(下田)

今是我慢 画面に映る観光地

阿蘇中央2年 松田 幸士

【評】旅は大人ばかりでなく、高校生諸君も修学旅行の中止や延期でコロナの被害を受けている。テレビ画面を切り取ることで、我慢の様子、コロナ終息後の旅を待ちわびていることがよく表現されている。(鳴神)

あいたしもた 祖母の口癖聞きたいよ

第二1年 野方 咲希

【評】祖母の口からしばしば出ていた熊本弁。それが今はもう聞けない。寂しい日々、懐かしさと優しさに満ちた句になった。(下田)

光る汗 実習中の木の下で

芦北3年 大石 純聖

【評】3年生は実習にも真剣みが増すだろう。一生懸命に頑張る汗だけに。涼しい木の下でその汗を拭くひと時が目に浮かぶ。(下田)

入選

光る汗 今ライバルと試合中

球磨中央3年 山本 椋也

今是我慢 最後勝つのは人だから

熊本商1年 太田 圭吾

光る汗 一つ一つが魂だ

ひのくに高等支援3年 眞弓 美末

あいたしもた 朝の晴れ間にだまされた

球磨中央3年 吉田 凜花

光る汗 みんなでとった優勝旗

城北2年 竹元 翼沙

努力賞

光る汗 父の背中にはむしゃんよか

高森1年 中矢 智晶

光る汗 数ミリ先に描く夢

文徳1年 大越 結葉

今是我慢 普通の日々に戻るため

球磨工3年 辻脇 蒼紫

光る汗 これで何キロ落ちるかな

芦北3年 田中 凜

あいたしもた 解答欄が一個ずれ

球磨中央2年 井村 瑠杏

あいたしもた まゆげそったら怒られた

城北1年 村上 大和

光る汗 風がふく度湧く元気

球磨中央3年 西 澄昌

あいたしもた ベストショットを撮り逃す

芦北1年 笠 誠也

今是我慢 何か始めるチャンスかも

熊本商1年 長谷 咲桜

光る汗 くやし涙と野球帽

城北1年 河上 凌

【総評】2千を超える投句をいただき、心より感謝いたします。高校生らしい発想の句、今の時勢をよくとらえた句など、たくさん素晴らしい句に出会いました。ただ馴染みの薄さからか、肥後狂句の基本的ルールを知っていればもっと良い句になったのと思う句がたくさんありました。基本をいくつか挙げてみます。

まず「笠付け」です。与えられた笠は変えることなく頭に置いてください。その後十二音で思いを表現してください。七五調が基本です。

次に「音数」です。十二音は厳守です。字余り、字足らずは厳禁です。拗音、促音は一音に数えます。

次に「禁句」です。差別的用語、差別的表現は狂句以前の問題ですが、もちろんいけません。

その他に熊本弁は使っても使わなくても構いません。大まかに言うとこれだけです。どうか皆さまには、今回の投句で終わることなく、十二音の言葉遊びをこれからも楽しんでいただければ幸いです。(鳴神景勝)

高校生の豊かな感性が溢れる沢山の句に出会えました。共感できる句、情景が目に浮かぶ句、微笑ましい句。大変な中にも楽しい選句の時間でした。

狂句にはいくつかの決まり事があります。それを守った上で作句することが肝要なのです。いい線に行っているのに決まり事から外れているため残念、という句が多くありました。

それともう一点、皆が思い付くような場面は外して作句することも一法です。今回出題の三笠でも

「今是我慢」ではコロナ禍での外出自粛(友達と会えない遊べない)明るく輝く未来が待っている、または未来を掴むためなど、

「光る汗」では運動や仕事での同じような場面の切り取り、医療従事者への感謝、ありがとうなど、

「あいたしもた」では、コロナ禍でのマスク忘れ、テストの準備や課題をしないなどの合句・類句が多数ありました。

狂句では合句(全く同じ句)類句(似てる句)は選から洩れることが多くあります。

鳴神先生の総評と合わせて読み、今後の参考にしてください。(下田民子)